

新古今和歌集全評釈

第九卷

久保田 淳

新古今和歌集全評釈

第九卷

講談社

新古今和歌集全評釈 第九卷

定価 三四〇〇円

昭和五十二年十二月二十五日 第一刷発行

著者 久保田淳

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二ー二ー二ー・千一ー二

電話・東京(〇三)九四五一一一一(大代表)

振替・東京八一三九三〇

題字 中島司有

装丁 講談社ブック・デザイン部

印刷所 株式会社東京印書館

製本所 大製株式会社

©久保田淳 昭和五十二年

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

## 目次

|               |     |
|---------------|-----|
| 新古今和歌集研究史序説   | 5   |
| 底本解説          | 27  |
| 諸本解説          | 31  |
| 異本所載歌         | 38  |
| 隠岐本跋文         | 41  |
| 撰者名注記・隠岐本合点一覧 | 51  |
| 引用書目解題        | 97  |
| 作者索引          | 183 |
| 上句索引          | 198 |
| 下句索引          | 228 |
| 基本歌語索引        | 255 |
| 新古今時代文化史年表    | 321 |
| あとがき          | 361 |



新古今和歌集研究史序説

底本解説

諸本解説

異本所載歌



## 新古今和歌集研究史序説

### はじめに

一つの古典の研究史は、本文伝来史、注釈史、批評史らの総合の上に書かれるべきであろう。新古今和歌集のそれは、万葉集や古今和歌集、さらには『源氏物語』などに比すれば短いとはいえ、元久二年（一二〇五）の一旦成立から数えて、七百七十余年の歳月を闊している。その間の本集の研究に関する諸事実を、右のような諸分野を鳥瞰し、総合した上で史的に叙述することは、全国大学国語国文学会の名の下に国語国文学研究史大成？『古今集新古今集』（昭和三十五年刊、昭和五十二年増補版、三省堂版）のような至便な書物がすでに編まれているとはいえ、そうたやすいことであるとは思われない。ゆえに、本格的な新古今和歌集研究史は他日を期すとして、ここには右の研究史大成などに助けられつつ、そのごくあらましを述べることにする。

### 一 中世

自身新古今時代を呼吸し、新古今歌壇に参加して、一時は歌名を謳われもした鴨長明の歌論書

『無名抄』における、新古今時代の回顧、同時代歌人評、幽玄論などは、いずれも貴重な証言である。就中、研究史的には、代々の撰集の恋の秀歌についての俊恵の論評に關連して述べられた長明自身の新古今秀歌についての論が、断片的なものながら、注目される。それは、

今これらに心おきて新古今をみれば、わが心にすぐれたる歌三首見ゆ。いづれともわきがたし。  
後の人さだむべし。

かくてさは命やかぎりいたづらにねぬ夜の月のかげをのみ見て

野辺のつゆ〔は〕色もなくてやこぼれつる袖よりすぐるをぎのうはかせ

かへるさの物とや人のながむらむまつよながらのありあけの月（梅沢記念館本による）

というのであった。右のうち、「野辺のつゆは……」は慈円の作、「かへるさの……」は定家の歌であるが、「かくてさは……」の詠は、現在の新古今集諸伝本には見出されない、従ってその作者も不明な作である。切継ぎ段階において切出され、おそらくは永久にその歌人の名は埋もれてしまった不運な恋の名歌である。

また、藤原長綱が聞書した『京極中納言相語』（先達物語）も、新古今撰進の際の具体的な作業や評定の有様を、定家や家隆の語として直接に伝えて興味深い。

新古今集以後の勅撰集は、新古今を意識しつつ、しばらくの間、新古今からやや心理的に距離を置くことによって形成されていった。藤原定家単独撰の『新勅撰和歌集』がそうであり、その息為家の『続後撰和歌集』もその例に洩れない。これに対して、その次の『続古今和歌集』は、後の『玉

『葉和歌集』とはまた異なった方法、すなわち、複数撰者で真名・仮名両序を掲げるという形式を踏襲することによって、新古今に近づこうとした撰集である。

建長三年(一二五一)冬、『続後撰和歌集』が成立した時、老残の尼の身ながら往年の新古今時代の栄光を背負って永らえていた俊成卿女(越部禪尼)は、撰者為家のもとに消息を送ってその功をたたえたが、その中で『千載』『新勅撰』両集とともに、新古今集を評して、次のようにいっている。

新古今又、春の花秋の紅葉を一つにこきまぜて、鳳池の秋月、梁苑の雪の夜とかや歌ひし心地して、御手づからなる詞遣ひまでめづらしくだかうおもしろく、京極殿のかんな序など、心詞及びがたく候ふ程よりは、乱れたる所も候ふやうに候ふ。(越部禪尼消息)

古歌や朗詠の佳句を引いて礼讃しつつも、そこに「乱れたる所」の存在することについて目をふつていないのは、以後の中世歌学における新古今に対する懷疑の姿勢に通うものがある。

為家は『詠歌一体』並びに『追加』において制詞を明示したが、その原拠となる歌の大部分は新古今の秀歌であった。制詞の思想は本来個人の自由な表現の制限という保守的姿勢に基づくものではなく、むしろ表現者の主体性を確立するための方法であり、その萌芽は明らかに定家に見出されるのであるが、そのことについては、今は深入りしない(拙著『中世文学の世界』所収「心と詞覚え書」参照)。当面の為家の制詞の制定については、為家にとっては少なくとも新古今集が直線的、連続的に継承されるべき遺産とは考えられていなかったらしいことを暗示しているということがいえるであろう。

為家の晩年の側室阿仏(安嘉門院四条)は、『夜の鶴』において夫のこの考えを祖述して、

又猶、千載、新古今の頃より近き作者どもの歌の名句どもを、さながらめをあはせてはひとりてよむ事、いと見ぐるし、よみいでたる人の為も高名にあらず、よく／＼このことをつゝしむべしと候ひき。

と教えている。同書はまた、古今以下代々の撰集についての寸評の中で新古今集の風体を評して、

新古今、昔の歌のやさしき姿にたちかへりて、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむとする玉笹の上の霞など申すべきを、あまりたはれすごして、歌の様又悪しきまになりぬべしとて、新勅撰は撰者おもふ所ありて、まことある歌をえられけりなどぞ承り候ひし。

という。ここでいう「昔の歌のやさしき姿」が古今集の風体をさすことは、前後の文脈から明らかである。ところで、「折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむとする玉笹の上の霞」という美しい比喩は、中世のこの才女が日頃愛読し、さらにはその講義をも試みた『源氏物語』の「帚木」の巻において、艶女の比喩として述べられている表現でもあった。

このような形での新古今批判は、藤原為顕の『竹園抄』における、定家の代表歌、

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るゝ横雲の空(新古今・春上・三八)

を「乱思病」の一例とする考え方にも連なっているであろう。すなわち、そこでは、

乱思病者、歌の心聞こえず、理のなき歌なり。歌は道理をむねとしてこと葉をかざるべし。しかるに理きこえざるは、歌にあらず。(中略)

春の夜の夢の浮はしとだえしてみねにわかるゝよこ雲のそら

これも乱思病の歌なり。たとへば底にはいかなる本文をかまへても、面に理なくは乱思病難<sup>レ</sup>遁<sup>ル</sup>。但、この歌名歌と云へり。(久松家本『竹苑抄』)と述べているのである。

俊成・定家・為家と相續された歌の家は、為家の子の代に至って、二条・京極・冷泉の三家に分派する。おびただしい数に上る定家仮托の歌学書は、おそらくこの三家の抗争の過程において、自家の権威を強めるために創作されたものであらう。鶺鴒系偽書と総称される、『愚見抄』『三五記』『愚秘抄』『桐火桶』などはその代表である。しかしながら、それらにはそれなりに方法論の主張があり、また新古今集やその歌人の作品の受容も試みられているのである。そしてまた後代にも大きな影響を及ぼしている。偽書といつてこれらを無視することはできない。

『自讃歌』なる一種の新古今秀歌選も、おそらくこのような歌壇状況の中で生まれた偽書の一つなのであらう。それは決して新古今集の全像を十分に把握していた者の選とは思われないが、しかし一通りの代表作者別秀歌選としての機能は果したのであった。

前述の三家の抗争は、『玉葉和歌集』撰進の際にピークに達した。それが延慶両卿の訴陳という争論であった。この、延慶元年(二三〇八)二条為世と京極為兼とが勅撰撰者の地位を争った係争の際の、両人の申状の抜萃である『延慶両卿訴陳状』には、先行勅撰集の事例に照らし合わせて自らの立場を弁明し、相手を論難するというその性質上当然のことながら、新古今集撰進の際の事情に言

及した箇所がある。それらは本来研究のためになされたことではないが、元久のこの文学史的事実を確認する結果となっている。

鎌倉末期のこの歌の家の三派分立を経て、時代は南北朝に入る。そこで主流たりえたのは、嫡流の二条家であった。二条家歌学の中心的存在として、二条為世の四天王の随一、頼阿がいる。

その著「井蛙抄」では、巻二「取本歌事」において、本歌取の方法論を述べるにとどまらず、その実例を掲げている。それらの中には当然新古今歌の作例も含まれている。たとえば、

しろたへの袖のわかれにつゆおちて身にしむいろに秋風ぞふく

本歌しろたへの袖わかるべき日をちかみ心にむせびなきにしもなく

などは、注釈の方で一応検討されてもよいであろう。また、巻四「同名名所」の項でも、新古今入集歌を含む撰集類の作品について、歌枕の考証を行なっているが、それも注釈的研究の一環と見なすことができるであろう。巻六「雑談」には新古今歌人についての逸話も少なくない。西行・定家・後鳥羽院らに関する伝承はそれぞれの作家論を試みる際にきわめて示唆的である。

この頼阿に師事した二条良基の『近來風体抄』には、新古今評が見出される。それは、

新古今ほど面白き集はなし。初心の人にはわろし。心得たらん人は此の集をみんなこといかでかあしかるべき。

というのである。為家以下の新古今敬遠の姿勢に十分気づきながらも、むしろその文学遺産を積極的に摂取しようという姿勢が認められる。本歌取の本歌の範囲について、『愚問賢答』における頼阿

の説を發展させて、

本歌には堀河院の百首の作者までをとる也。同じくは名人の歌をとるべし。勅撰は後拾遺までをとるべしと申しき。但し、いまは金葉、詞花、千載、新古今などをとりたむは、なにかくるしかるべき。此の分左相府へも申し侍る事なり。連歌には新古今までをもとるなり。

と説くのも、そのような新古今に対する積極的な姿勢の具体的な現われである。

良基とともに南北朝の文化人として逸することのできない人は、耕雲明魏(花山院長親)である。

その著『耕雲口伝』においては、新古今尊重の立場が一層鮮明である。すなわち、

三代集のうちには、後撰、拾遺の歌は、いかにぞやうるさきことのまじりて聞ゆるなり。千載集のさきほどに、経信卿、基俊、俊頼いできて、此の道中興せり。いはんや、西行上人、俊成卿、定家卿など、和歌の大聖人なり。これによりて、新古今の一集文質合兼ねて、今古のいひふるさぬ心をよみ出でて、淳古の風一変するに似たれども、唯古ばかりをまなびて珍しき心をよみいでざるは、昔の人の口まねにてこそあらめ、歌の道はいかでか相統せん。

といい、

詞は歌の文なり、かざりなり。後撰、拾遺より金葉、詞華のころはひまでは、歌をよむに、心を本とすといへども、詞をえらぶことなきによりて、歌の姿いやしきに似たり。君臣合体、時節到来するによりて、新古今の一集、この泉みなもとふかきみにあらず、詞の花にほひ妙にして、人のめをおどろかし、人のみゝをよろこばしめて、錦繡を織りみだし、金石を合奏するに似たり。

と礼讃しているのである。そして、本歌取の技法の説明に際しても、新古今入集歌を例に取って説いている。しかしまた、「まなびてわろかるべき体」として、新古今集の、

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るゝ横雲の空(春上・三八 定家)

よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇る夕立の空(夏・二六三 西行)

物思はでかゝる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮(秋上・三五九 良経)

秋とだに忘れんと思ふ月影をさもあやにくに擣つ衣かな(秋下・四八〇 定家)

移り行く雲にあらしの声すなり散るか正木の葛城の山(冬・五六一 雅経)

などの作を掲げて、

これらは上手の風骨を尽して幽意微詞おもしろしといへども、なか／＼ことのはなし。初心の人、かゝる体を面白くおもひて学びよまば、邪路におつべき事決定なり。千載のしたに、もし此の道を発得する人、千万人の中に一人出来る事あらば、おのづからよみもや似せんずらん。ともいっている。

この他、南北朝の武將歌人であり、連歌にも心を寄せていた今川了俊や、その弟子正徹の著述には、新古今集それ自体に関する発言よりも、むしろ新古今歌人についての発言が多く見出される傾向があるように思われる。了俊は『西行上人談抄』や自筆本『近代秀歌』の伝来にも関与しているし、正徹の名は『拾遺愚草』『壬生二品集』『家隆卿百番自歌合』などの奥書に見出される。

正徹の弟子が心敬である。彼は和歌・連歌を根本的には一つのものと考えていたから、その連歌

の学書『さゝめごと』には、和歌に関する言説も少なくない。そこでは「古人自讃歌少々」として、主に「自讃歌」から抄出したと思われる秀歌例をも掲げている。

新古今集についてのやや纏まった注釈は、東常縁の『新古今和歌集聞書』をもって嚆矢とする。その前後から連歌師達による注釈もぼつぼつ現われるようになった。すなわち、兼載の『新古今抜書抄』、宗長の『宗長秘歌抄』、肖柏と伝える『九代抄』のうちの『新古今注』などがその例である。新古今そのものではないが、宗祇・兼載による『自讃歌』の注も、実質的にはほとんど新古今選釈と見なすことができる。そしてまた、清原宣賢かと想像される『新古今注』、その濃厚な影響下に成ったと思われる著者未詳の『新古今和歌集聞書(後抄)』などが生まれた。

一般に中世歌学、中世古典研究を集大成し、その遺産を近世に伝えた人物と見られる細川幽斎(玄旨)は、新古今研究においても例外でなく、二種の『新古今和歌集聞書』を集成、取捨補訂して、後代に伝えた。しかし、その段階においても、新古今の注釈は選釈にとどまっていた。幽斎の門弟烏丸光広はこの師説に基づいて、全注を試みようとしたらしいが、それもついに試みに終った。『新古今私抄』として伝わるものがそれである。

## 二 近世

細川幽斎の著述が中世歌学の結集を意味するとすれば、いまだ過渡的とはいえ、松永貞徳のそれ

はやはり近世における古典学の端緒をなしたものであると見られるであろう。その著『九六古新注』はささやかなものではあるが、肖柏と伝える『九代抄』と『六家抄』とから不審と思われる箇所を抜出して、これを批判し、自説を開陳したものである。そこに見出される旺盛な批判精神は近世の時代精神に連なると思われる。

同じような姿勢は加藤磐斎(等空)の『新古今増抄』にも認められる。彼は同書において、『新古今和歌集聞書』の所説を「古抄云」としてまず掲げ、次いで「増抄云」としてこれに自説を相対峙せしめている。自己主張の姿勢は鮮明である。ただし、その所説は儒仏に深くなずんでいたと思われる注釈者の思想を反映して、そのすべてが正鵠を得ているとはいいい難い。とはいっても、本書に至って新古今和歌集はともかく全釈書を得るに至ったのである。

貞徳の弟子北村季吟は、師や磐斎に比すれば、あるいはむしろ保守的な学者といえるかもしれない。彼は幽斎によって集成補訂された『新古今和歌集聞書』を根幹とし、さらに宗祇その他の『自讃歌』の注、師の『九六古新注』、口訣としての師説などを総合し、それらに「愚案」として自説をも加えて、『新古今増抄』に次ぐ本集の全注釈を成した。しかもそれは八代集全体の全注という壮大な試みの一環にすぎなかった。『八代集抄』のうちの『新古今注』がそれである。一般的にいつて、季吟の古典注釈書は、かならずしも創見に富んでいるとはいえないかもしれない。しかしながら、新しい文化の開明期にはこのような学者の出現が要請されるのである。季吟は啓蒙学者としての役割を十二分に果たしたといえるであろう。